第１回研究設備センター先端研究設備部門会議議事録

日時：平成 25 年 6 月 26 日 16:20～17:15
場所：東 8 号館 4F 会議室
出席者：青山、守屋、桑原、加藤研究支援員、野崎（敬称略）

審議事項

1. 予約システム利用の徹底および利用状況の閲覧

（ア）機械・ロボット室では、あまり予約システムは活用されていない理由として、承認が必要であり、学外では承認ができなく利用しづらいことが青山先生から報告され、その対応として、桑原先生を設備管理者として桑原先生に承認をお願いすることにした。

（イ）利用状況のデータは現在システム管理者のみが閲覧できるが、研究設備センターの HP の右下にバーナーを設け、利用状況を表示させ、誰にでも見えるようにする。更新の頻度については検討する。また、６月末にはベータ版が起動はじめるのでそれに合わせて利用状況の閲覧を HP に掲載するようにする。

（ウ）以前、懸案となっていた使用記録では、現在は、予約の時間が使用記録にコピーされるよう改善されている。

2. 装置の更新および設備マスタープランについて

来年度の概算に、先端研究設備部門からは申請した先端ナノマシン材料システムが含まれることが部門長より別紙 1-1 に基づいて報告された。また、研究協力課の設備マスタープランの資料を研究設備センターの HP へ載せるように桑原先生にお願いした。

3. 今年度の運営について

桑原先生より公募で募集する技術職員は、大学の薬品管理等に従事するものの研究設備センターの薬品管理等には直接かかわらないことが報告された。したがって、これまで通り、各研究室の教員が安全管理にあたり、加藤研究支援員がそれを支援することになった。今年度の部門委員会は、野崎部門長、青山室長、牧室長、桑原研究設備センター教員、加藤研究支援員から構成される。事務補佐は、荒木さんが担当する。

4. 今年度の予算（設備の維持・運営）及び会計

今年度の予算配分は、別紙 1-2 に基づいて審議され、提案を認めた。装置につく維持費については、財務より連絡があり、従来通りその装置を管理している室に配算する。ナノ微細加工と 3D マイクロ加工機について維持費については、昨年度のように購入費の割合で材料・デバイス室と機械・ロボット室に配分する。そのほか先端研究部門に

配分された運営費が 6.5%減額されたため、SVBL の研究施設を先端研究設備部門として研究設備センターに移した際、三木理事が各室での必要経費と認めた金額を設備、施設維持費として確保し、運営費を減額することとした。今年度は、年報を web 掲載とし、昨年度の連携室の準備金が必要ないので 120 万円運営費を減額とすることとした。先端研究設備部門には、クリーンルームを初め、維持費がつかない高額維持管理費が必要なものが多くある。光熱費については、運営費から支払う。節電が大学より要請された場合はできるだけ従う。使用についての課金については、当面使用者に課さないが、大学からの運営費で施設維持ができなくなった場合将来検討する。基盤研究設備部門と異なるのは、利用者が複数の設備を利用しているため課金を設備ごとに行うことが難しい点である。昨年度の各室、各装置ごとの会計報告は、後日別紙 1-3 として議事録に添付することとした。

5. 広報

(ア) 施設利用説明会（基盤研究設備部門と合同？）いつ、どのように行うか？

先端研究設備部門の材料・デバイス室では、常時登録施設利用者には、説明会を毎年年度初めに行っている。今年度は、先端研究設備利用希望者を幅広く募るため学内にメールを出した。また、各装置の講習会で必要と思われる場合は、講習会の案内を全学に研究協力課に依頼してメールで送る。先端研究設備部門全体の説明会を行うか検討したが、現時点では各室で行ってもらうことにした。材料・デバイス室の説明会は、現在年度初めに行っているが、後期に行う必要があるかも検討したが、当面は年度初めにのみ行うこととした。

(イ) ポスター（研究設備、研究）の作成

東８号館のパネルを更新するか検討したが、現時点では、更新の必要性がないとし、来年度以降再び検討することにした。研究設備センターのパンフレットの作成は桑原先生が検討することとなった。

(ウ) ホームページの作成

ホームページについては、研究設備センターのホームページより入る荒木さんが作成した先端研究設備部門のホームページを加藤研究支援員が見直し、そこから先のコンテンツを充実させることを確認した。

(エ) 研究成果報告書（基盤研究設備部門、低温部門と一緒）

今年度は、web 掲載のみとし、その原稿を９月末をめどに集めることを確認した。

(オ) 産学官連携 DAY での施設公開

材料・デバイス室２名、機械・ロボット室１名、光・バイオ室１名の TA と研究支援員により公開され、クリーンルームの見学も実施した。昨年度よりは、多摩信以外の施設の見学者が３割程度多かった。

(カ) 内部利用者の拡大、課金

ホームページを充実させ、設備の講習会を学内に広く伝えていくことにより内部利用者を増加させる。

6. グループ間の連携をどのようにしていくのか？研究基盤部門との差別化？
連携室が整備されたが、全く異なる評価装置が置いてあるので、領域の区切りを明確にする必要性が指摘された。また、連携室の設備が室を超えて利用できるようにパンフレットを作成し、HP 上にも掲載する。室を超えた合同の発表会（昔の SVBL 発表会）も考えられるが、今後の検討事項とした。